

田園調布教会のオルガン

*The Organ
of
Denenchofu Church
The United Church of Christ in Japan*



オルガン奉献によせて

日本基督教団田園調布教会
牧師 田村 博

「ハレルヤ。新しい歌を主に向かって歌え。
主の慈しみに生きる人の集いで賛美の歌をうたえ。」
(詩編104:1)

このたび新たに献堂されたばかりの新会堂に、パイプオルガンが完成し、奉献式を行うことができますことを心より感謝し、主の御名を崇めます。

田園調布教会では、礼拝賛美の楽器のために長年にわたって多くの祈りがささげられてまいりました。今からちょうど30年前、「創立50周年記念事業」の一環として行われた記念音楽会を一つの契機として「楽器基金」が新設されました。以来、献金がささげ続けられ現在に至っています。一方、新会堂のための祈りは、長期計画準備委員会、長期計画委員会、会堂建築検討委員会、会堂建築委員会と受け継がれ、この二つの流れが2012年度に、みごとに一つに合流したのです。そして、主が与えてくださった絶妙なタイミングの中で、会堂の献堂と同じ年度内に完成するという驚くべき喜びを私たちは体験することになったのです。

オルガンの制作は、オルガン小委員会を中心とした慎重な検討の結果、ドイツのFischer + Krämer社にお願いすることになりました。会堂での組み立てと整音の作業はクリスマス、年末年始の休暇はをさんで奉献式の前日まで2ヶ月近く、教会の活動を妨げることなく行われました。その間、ドイツから来日した技術者たちは朝早くから夜まで実によく働いて下さいました。心から感謝申し上げます。

このオルガンの音色が主なる神によって用いられ、豊かな賛美が会堂に溢れ続け、主の栄光が力強くあらわされることを願っています。



パイプオルガン奉献に際し

オルガン小委員会委員長 前田恭子

長年私たちが望んでいたパイプオルガンが、遂に与えられました。この特別な事業が行われた時に立ち会えたことを、教会員皆で共に喜びたいと思います。新会堂の献堂後、こんなに早くに設置できるとは、会堂建築開始前にはほとんどの会員は思っていなかったことでしょう。もちろん多くの方々から捧げられた献金と、先輩方から引き継いだ長年に亘る教会の祈りのお蔭です。しかし、思いがけなく、今このタイミングで設置が可能になったのが主のご計画ならば、私たちは何を受け止めるべきかと考えました。一つ一つが大きさも違い異なる音色のパイプが約1500本も集まって、美しいオルガンの中に並び、それぞれが精いっぱい、賛美をしていながら、それはとても美しいハーモニーを作り、一つとなって主を賛美する、正に教会のあるべき姿を示されていると感じます。

今、教会は、新会堂、新しい宣教計画等、様々な意味で節目を迎えています。主から示されたメッセージを、美しいオルガンの奏楽に合わせて賛美する度に思い起こし、主にもっとも良いものをお捧げできる教会であるために、主によって小さな私たちが用いていただけるならば、この上ない幸せであると思います。


田園調布教会の新しいオルガン

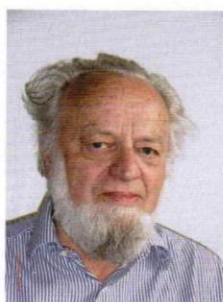
フィッシャー+クレーマー・オルガン建造所は1970年、二人のオルゲルパウマイスター、フリードリヒ・ヴィルヘルム・フィッシャーおよびヨハネス・クレーマーによって設立されました。新しいオルガンの建造、移築、また価値ある歴史的オルガンの修復の分野で多くの実績をあげ、現在までに200を超すオルガンをドイツをはじめとするヨーロッパ諸国に、また2台を東京に建造しました。最大の楽器は1996年に建造されたケルンの使徒教会の80ストップのオルガンです。2003年にヨハネス・クレーマーが急逝したのちはオルゲルパウマイスター、ゲオルク・フィッシャーが会社を引き継ぎました。その伝統は継承され、制作者たちの長年の経験に基づく技術によって、芸術的で高い品質の新しいオルガンを建造し、また歴史的楽器の修復、保守の分野でもさらなる実績を重ねています。オルゲルパウマイスター、フリードリヒ・ヴィルヘルム・フィッシャーも顧問としてその活動を支えています。


田園調布教会の新しいオルガンは24のストップ、1474本のパイプを備え、会堂にふさわしい規模のオルガンです。許された設置範囲に礼拝堂空間に望ましい規模のオルガンを設計する事は私たちにとって一つの挑戦でした。プロスペクトのデザインについて私たちは複数の案を提案し、河野氏をはじめとする委員の方との話し合いの中で現在のような形が決定されました。ケースは無垢のオーク材でできています。風箱はシュライフラード、アクションは何百年も保たれた技術である鍵盤と風の弁が機械式につながった方式であり、オルガニストは直接楽器とコンタクトを持つことができます。また、いくつものストップの組み合わせをセットできる最新のゼッツァー装置、II/I、II/I Sub、I/P、II/Pカブラーなどの演奏補助装置も備えています。その仕様から見て、このオルガンは礼拝のための楽器であることはもちろん、さらに演奏会のためにも十分に使えるストップ数と音色を持っています。

田園調布教会の皆様が寄せてくださった私たちへの信頼、そしてあたたかいもてなし、また協力に対して心から感謝します。私たちは同僚一同とともに、このオルガンが末永く皆様に喜びと力を与えることを願っています。




オルゲルパウマイスター
ゲオルク・フィッシャー




オルゲルパウマイスター
フリードリッヒ・ヴィルヘルム・フィッシャー

捧げられたオルガン

河野和雄

念願のパイプオルガン設置に向けて、オルガン小委員会が設置され具体的に動き出したのは2011年の7月であった。新会堂の楽器のための積立はかなり前から行われていたが、建築が優先されるのは当然であり、オルガン設置に必要な額に達するのはまだ当分先であると思われていた。新会堂の建築開始直後、ある教会員夫妻から「不足する額を献金したい」との申し出があった。教会は感謝してこれを受け、急遽、設置のための委員会を組織したのである。

教会員へのアンケート、オルガン見学会、数社への見積り依頼、ビルダーたちとの面接その他の必要な手続きを経て、翌年4月の教会総会でドイツのフィッシャー + クレーマー社に制作を依頼することが決定された。正式な契約は新会堂の建築がほぼ完成した6月に同社から代表者ゲオルク・フィッシャー氏が来日したときになされた。それに先立って着工を依頼したとはいえ、この規模の楽器が8ヶ月で完成したのは異例と言える。夏の休暇も返上して制作にあたってくれたというフィッシャー + クレーマー社の尽力に感謝したい。

フィッシャー + クレーマー社の工房があるエンディングンはドイツ南西部、フランスとの国境に近い中世のたたずまいを残す小さな美しい町である。カイザーシュトゥール --- 直訳すると「皇帝の椅子」 --- と呼ばれる丘陵のふもとにあるこの一帯は良質のワインを産することでも知られている。西に7キロ行ってライン川を越えればフランス。アルザスと呼ばれるこの地方では18世紀にアンドレアス・ジルバーマンがフランス古典スタイルの銘器を多数制作した。戦争のたびにドイツ領になったりフランス領になったりしたこの地域ではドイツ、フランス両文化が交錯、また融合してオルガン文化にとっても豊かな風土となった。田園調布教会に設置されたオルガンはドイツ製ではあるが、フランスのオルガン音楽にも十分対応している。特定のレパートリーを意識した様式ではない。パイプの整音は柔らかく、この地域の豊かな響きを伝えている。



3つのトランスミッション（2つのストップでのパイプの共用）を含む24ストップという規模はこの会堂には十分すぎるかもしれない。5オクターブの手鍵盤、2オクターブ半のペダル鍵盤もオルガンとしてはフル規格である。第1鍵盤、ハウプトヴェルクは主としてブレノを作るプリンシパル系のストップ、その増強のためのトランペット、賛美歌のメロディーを浮き立たせるのに有効なホルンなどで構成されている。16フィートのファゴット、第2鍵盤を第1鍵盤にオクターブ



下でつなぐサブキャプラーも特徴のひとつといえる。これらは響きの重厚さを得るためばかりではなく、譜面よりオクターブ高く弾くことにより更なる音色の多様性を得ることを意図したものである。第2鍵盤、シュヴェルヴェルクには倍音管を含むフルート系のスト

ップが配され、色彩的な音色を作る。第2鍵盤に属するパイプ全体は箱の中に収められ、よるい戸式のシャッターの開閉により音量の調節が可能である。ペダル鍵盤には6つのストップがあるが、このうち3つはハウプトヴェルクからのトランスミッションで場所の節約をしている。

アクションは手鍵盤については伝統的な機械式であるが、ペダル鍵盤のアクションだけはスペースの関係から電気式となっている。

補助装置としてゼツツァー式のコンビネーションも装備されている。1200通り以上のストップの組み合わせがあらかじめセットできるが、複数のオルガニストが使うオルガンとして、またコンサートなどの場合にも便利な装置である。さらにこれらをUSBメモリーで記録することもできるとのことであったが、それは断った。オルガンはやはりアナログな楽器であってほしい。

中央についている金色の星は「ツィンベルシュテルン」とよばれ、たとえばクリスマスの曲の中でふさわしい個所でそのストップを引くと星が回り、中につけられた鈴が鳴る。クリスマスの時期には楽しい雰囲気をもし出すことであろう。子供たちがオルガンに興味を持つきっかけになるかもしれない。いずれ幼稚園の園児や教会学校の生徒の中から未来のオルガニストが生まれるかもしれない。



設計にあたっては場所の制約が厳しかった。この地域は住宅地域であり、10メートルの高さ制限があるため、2階ギャラリーの高さが取れなかった。聖歌隊の場所が2階になったのに伴いオルガンの設置場所もギャラリー上となった。天井高は理想的には5メートル以上はほしいところであるが、最終的には4メートル20センチしか取れなかった。加えて、オルガンの製作開始後にギャラリーの手すりの位置を変更せざるを得ない事情が起こり、楽器本体の奥行きを少しでも少なくする工夫がなされた。東日本大震災によるオルガンの被害も考慮され対策がなされた。背面の壁はオルガンを支える強度を持たないので、床と天井の梁に固定された鉄骨のフレームが作られ、オルガンはこのフレームと床にしっかりと固定された。前面のパイプも落下を防ぐために、欧米における通常の方法よりしっかりした固定方法がとられている。いずれ起こると考えられる大地震の際にも、オルガンが壊れるのは仕方がないとしても、人的被害は絶対に出してはならない。

このオルガンは礼拝の奏楽のために用いられることを主目的として設計されているのは当然であるが、それだけでなくオルガンを使ったコンサートなどにも十分使える規模と音色を持っている。伝道のための強力なツールとしても使えるのである。

教会員の献身のしるしとして捧げられたオルガンがいつまでも言葉に仕える楽器として、また聴くひとに喜びと慰め、安らぎと力をあたえる楽器として用いられんことを。





●コンテナ、工房を出発



●教会に到着



●組立て開始



●部材がいっぱい



●形が見えてきました



●吊り上げ作業



●二人のマイスター G.フィッシャー氏(右)とグレーテル氏(左)



●パイプの組み込み



●パイプ置場



●吊り上げ作業



●カーニツヒ氏



●ピュッキング氏



●ルーデルバッハ氏



●F.W. フィッシャー氏



オルガン仕様

第1鍵盤 Hauptwerk C - c⁴

Principal	8'
Flüte	8'
Octave	4'
Doublette	2'
Mixtur 4fach	1 1/3'
Cornett 4fach ab f ⁰	4'
Trompete	8'
Fagott	16'
Tremulant	

第2鍵盤 Schwellwerk C - c⁴

Bourdon	8'
Salicional	8'
Schwebung	8'
Principal	4'
Flüte	4'
Nasard	2 2/3'
Flageolet	2'
Tierce	1 3/5'
Larigot	1 1/3'
Cromorne	8'
Tremulant	

ペダル Pedal C - g¹

Subbass	16'
Offenbass	8'
Flüte	8'
(第1鍵盤Flüte 8' と共通)	
Choralbass	4'
Trompete	8'
(第1鍵盤Trompete 8' と共通)	
Fagott	16'
(第1鍵盤Fagott 16' と共通)	

Zimbelstern

カブラー II/I, II/I Sub, I/P, II/P

アクション
メカニカル キーアクション(マニュアル)
エレクトリカル キーアクション(ペダル)
エレクトリカル ストップアクション

補助装置 ゼッツァー式コンビネーション 8x8x10x2

ストップ数 24

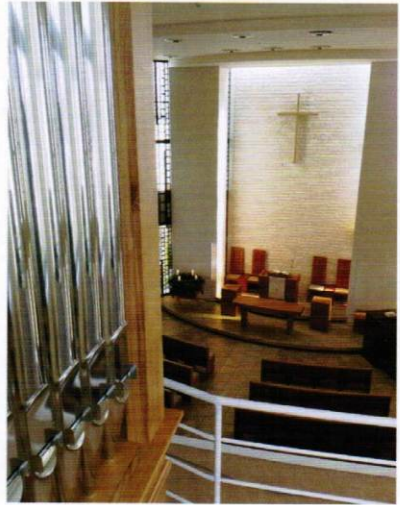
パイプ総数 1474

制作・組立 Fischer + Krämer 社

整音 Ralf Rudelbach

設置協力 マナ オルゲルハウ

奉献 2013年1月20日





日本基督教団 田園調布教会

〒145-0071 東京都大田区田園調布3-34-18

e-mail denenchofu@den-church.jp

URL <http://den-church.jp/>

Tel. 03-3721-2811 Fax. 03-3721-2814